私たちの町の文化財

■第10話　鐘ヶ淵

まだまだ暑い日が続きます。ですので、今回は雨乞いの話を一つ。横手の妙永寺付近には、古い井芹川の流れが、小さな川となって残っていることに、お気付きでしたか？井芹川は、江戸時代頃は熊本城の西側から段山を廻って横手を経て坪井川に合流していました。特に段山から横手までの流域は祓川（しめかわ）と呼ばれ、付近は寺院が多く、高麗門外でも城下町並みの扱いを受けていたようです。昔この辺りに大きな淵があり、身投げした女性が竜になったそうで、父親がその姿では可哀相だ、恨むのは止めてくれと説いたところ、竜は今後皆のために何かしたい、干ばつの時は鐘を沈めて知らせてほしいと言い、淵の底に消えたという伝説があります。その後、村々では干ばつの際は淵に鐘を沈めて雨乞いをするようになったといいます。この雨乞いは鐘巻と呼ばれ、村々で趣向を凝らした作り物が出され、当時は肥後一番の作り物、仮装、囃子の行列として人気があったようです。『肥後村々雨乞行列彩色画』（熊本大学蔵）や『鐘巻雨乞全略図』（熊本博物館蔵）には行列の様子が描かれており、淵があったとされる場所に立てられている看板にその一部を見ることができます。古い井芹川の流れに沿って、当時の賑わいを想像しながら散歩してみるのも趣があるかもしれません。

熊本市文化振興課　岩谷史記氏

横手１丁目を流れる井芹川の旧河川

熊本城を中心とした城下町を作るために、加藤清正による白川・坪井川・井芹川の大規模土木工事があったモンね…

平成27年10月　みにくま第150号に掲載